

手と手をつなぐ 持続可能なものがたり

宮城県丸森町「持続可能」
刈田路代・佐藤浩昭

第1章 筆甫〜かりっぺ（刈田路代）のものがたり〜

先日、震災直後・2011年の4月のある日のメモを見つ、しばらく眺めた。

そこには『筆甫に帰る時』に持っていく準備物が書いてあった。

「マスク、手袋（ゴム）、カップのような上着&巾着袋（ビニール素材）、マウンテンバイク、石油ストーブ、長ぐつ、食品成分表……」

それは放射能汚染から逃れるために仙台の実家に避難していた時に書いたもので、「やはり筆甫に帰りたい」と思い、その準備をしている時のメモだった。その頃に得ていた情報や自分の思いがその準備物メモに現れていたが、ほんの数年前の自分の考えなのにその切羽詰まった感覚や、必死で道を探している姿は、今では少しペールがかかったように見え始めている。



2011年の南部小麦

私が初めて筆甫の地を踏んだのは、2009年2月のある晴れた日だった。

宮城県の最南端の町・丸森のそのまた南、福島県に張り出した形をしている「筆甫地区」の、ある一軒の小さな空き家を背に立ち、目の前に広がる田んぼと山々を見ながら「ああ……、私は間もなくここに住むだろう」と思っていた。

創作活動をしながらアルバイトを続けてきた私は、それまでの人生のほとんどを仙台のアスファルトに囲まれた住宅地にある実家で暮してきた。

ずっと自然の中で生きることには強いあこがれは

1ヵ月後の6月末には、仙台の個展で展示した絵を、そのまま筆甫の新居（「かりっぺ亭」と名付けた）で展示することに決め、それに間に合うよう床の張替えを地元のひとと一緒に、開催にこぎ着けた。「ここには何にもねえべ〜」と地元の人は言うけれど、私は『筆甫には私の欲しいものは何でも揃っている』と思った。そしてここには女性一人ですべて自然に受け入れてくれる懐の深さがあった。私は意気揚々と荒れ地を開墾し、畑を作った。チラシやパンフレット、イラストの仕事を自宅で行って、細々と暮していた。

筆甫の朝は、本当に素晴らしかった。朝日に輝く山々や田畑に見とれ、なんの濁りもない透き通った空気を吸い込んでみると、突然すぐそばの茂みからキジがけたたましく鳴きながら飛び立って胆をつぶし、一人笑った。

見たこともない様々な種類の虫たち、目の前の枝垂れ桜の枝にとまって美しい声でなく鳥たち、縁の下から逃げていかないミツバチたちとの共同生活……そして小さなこと、たとえばホウキで集めた家の中のチリを近所を気にせず外に捨てられること、大きな声で鼻歌が歌えること、月の光の中を散歩できること……。筆甫での日々で、それまで出来ずにいた本当にしたい生活を実現することができ、私の心の中は晴々としていった。

冬は薪ストーブ（だるまストーブ）を設置し、近所の山から焚き木をもらったり友人から廃材をもらったりして部屋を暖め、その火で料理をした。

電動のチェーンソーと、「かりっぺ亭」に元々あった斧で薪を割り、すぐ向かいに立っている観音堂の横の杉の葉を焚き付けにして暖をとった。

筆甫の冬は、笑いがこみ上げるほど寒かった。建てつけの悪い木戸が半分だった「かりっぺ亭」の、特に最初の冬は障子も張りそこなってしまう、寝室は極寒部屋となった。



筆甫の朝

第2章 耕野〜ひろさん（佐藤浩昭）のものがたり〜

生い立ち

私は昭和44年丸森町耕野に3人兄弟の末っ子として誕生した。耕野地区は静かな山里で地域の結びつきは強く、我が家は代々農業を営業とし、田や畑、養蚕、干し柿、炭焼きなどで生計を立て暮してきた。

私は小さい時から甘やかされて育ち、社会人になってからも仕事を言い訳にし、地区の行事や農作業など親まかせにして自由に過ごしてきた。

30歳代も半ばとなり相変わらず独身生活を謳歌していたが、一つのラジオ番組が私の生き方、考え方を考えさせてくれた。



ひろさん特製、黒豆入り玄米おにぎり

青い地球を思う

4月22日のアースデイ（地球を愛する日）にちなんで行われた一青窈さんのコンサート模様で、南極の過酷な環境の中、ペンギンの夫婦が力を合わせ子育てをする映画「皇帝ペンギン」を鑑賞した後の感想を一青さんは「人間は暑くても寒くてもエネルギーを無駄遣いし、人間ってぜいたくな生き物ですね」と語り、その言葉が私の心に重くのしかかった。

その後、地球温暖化などの環境問題に興味を持ち様々な本を読んでいくと、世界の貧困問題や日本の格差社会、原発や沖縄の基地問題、食品添加物などが上さされることが余りに多く、先進国がいかにか途上国の生活を犠牲にし、さらに地球環境を汚しているか、やるせない気持ちで一杯になった。

気が付けば、3白（白米・食パン・白砂糖）に違和感が生じ、玄米ごはんを求め仙台市の自然食品店「おひさまや」へ通うようになっていった。

有機農業や物を丁寧に作っている人々どこかでつながりたいという気持ちを、私はいつしか心の中でひしひしと感じるようになっていった。

仕事とは そしてこれからのこと

私は7〜8年前から仕事に違和感があり、「仕事は何のために行うのか」ということをずっと考えていた。最終的に、「仕事は自分自身を表現するもの」、「自分自身を最大限に活かしたい」と思い、さらに結核という驚くような出来事もあり、ここが決断の時であると2015年3月で27年間勤めた仕事に終止符を打った。

仕事を辞め、様々な「本」のイベントに参加した。ゴールデンウィークには仙台市定禅寺通りでのケヤキ並木の下、「一箱古本市」に出店、屋敷を「安全な古本 持続可能」とし、「食の研究本」「健康」「原発」などのテーマで本を並べ、老若男女、本に触れていただき会話を楽しんだ。

6月には「Book Book Sendai」主催の新企画で、「てとて」とも参加した「私的研究所」に自分のお勧めの本を展示させていただいた。11月には「丸森町読み聞かせボランティア養成講座」を受講し、保育園の子どもたちへ絵本の読み聞かせを行った。



初めて二人で訪れた「賢治の畑」

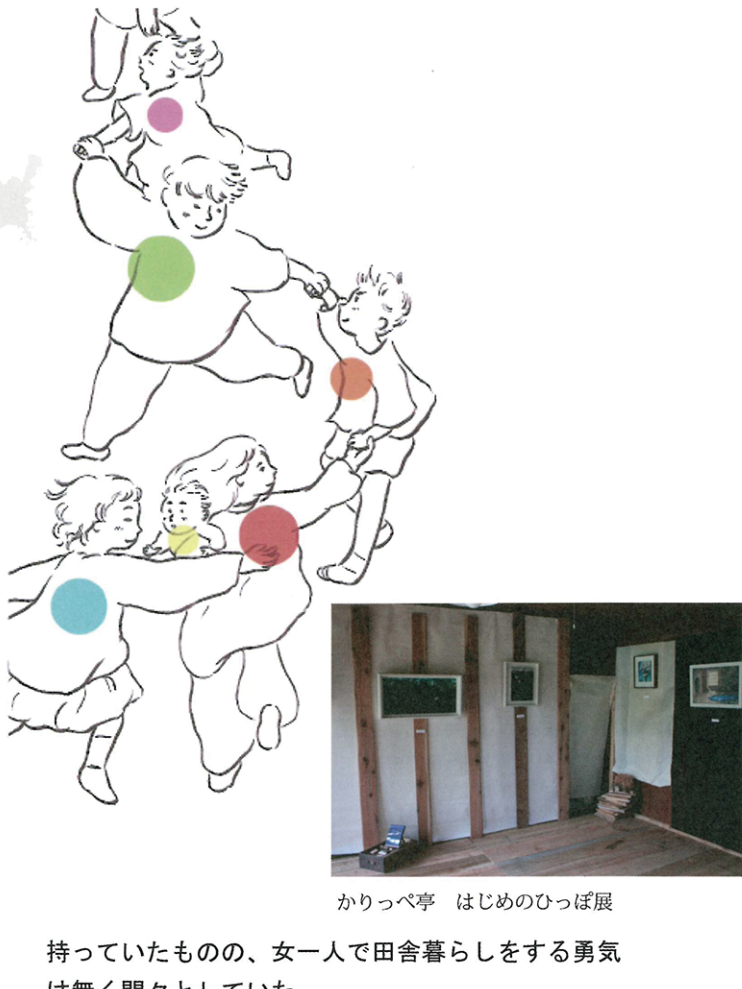
どれも楽しく、人々とコミュニケーションを図ることができ、「本」には人と人を繋げる力があると感じた。

私は、自宅を活用し小さな「本の空間」を作れないかと考えている。

森の中でのんびりできる「田舎の本屋さん」で、ゆっくり本に触れてほしいと思う。



イラスト：刈田路代



かりっぺ亭 最初のひっば展

持っていたものの、女一人で田舎暮らしをする勇氣は無く悶々としていた。

しかし、2008年秋、図書館で借りた本で『自然農』という農法やその考え方・生き方を知り、居ても立ってもいられなくなり「自然農を試みながら大自然の中で創作活動をして暮らしたい」という思いが募って翌年の2月、前述したように初めて訪れた筆甫に魅せられ、田舎暮らしを決心した。

2009年5月仙台で個展を終えた数日後には自家用車いっぱいに、ベランダで育てた野菜の苗と引越しの荷物を詰め込んで、筆甫へと出発した。

初日はマムシとの遭遇に驚き、ご近所のおばあちゃんの「マムシはとっ捕まえて食え」という言葉にさらに驚き、縁の下に巣くったミツバチにも驚いた。

筆甫に引っ越して最初の頃は、「これが本当の暗闇なのか」と思うほどの真っ暗な夜に、一人怯えていた。トイレも外にあったので必死の思いで用を足し、ラジオをつければなしにして寝た。夜に怯える日々はしばらく続いたが、そのうち目の前に広がる田んぼからカエルさんの声が聞こえるようになり、日に日にその声は大きくなり、ついにカエルさんの大合唱となった。そのとき初めて「この闇はただの暗闇ではなく、たくさんの命が息づいているあたたかい闇なのだ」と気づいた。

冬の厳しさはこたえたが、その後にくる春が今までになくありがたかった。移住する時からお世話になっていた「ひっばU! ターンネット」の仲間とも移住者推進の活動をして、新しく「移住したい」という人たちが訪ねて来たり、筆甫に興味がある人たちが通って来て友達になったりと「楽しくなるぞ、筆甫!」と思っていた。



筆甫特産「へそ大根」を作ったみた

あのまま、地震が起こらなければどうなっていただろう？

原発が無事だったら？

なんの疑問もなく、筆甫生活を謳歌していたらうか。おそらく……そうだっただろう。

しかし、放射性物質は雲となってやってきて、この宮城県南の土の上にも降り注いだ。

汚染されているはずの風景を目の前にしながら立ちすくんでいた日々。

無気力になって寝込んだ日々もあった。放射能の影響を少しでも軽くしようと、実家の仙台と筆甫を行き来しながら、（心もあっちこっち揺れながら）2011年はほとんど仕事もできずに過ぎていった。しかしやがて、放射能汚染と向き合っ活動している県南の仲間の輪が広がっていき、思いを同じくし（または微妙に違っても）繋がって何か前向きに生きていこうとする空気の中で私は救われていった。そしてその輪の中で私は本当に強くなっていき、まだ微妙な心の揺れはあっても自分の芯のようなものを少しずつ作っていったように思う。

2012年5月からは隣の山元町にある障害をもつ人のための作業所で、アトスタッフとして働き始め、生活に一定のリズムが付き始めた。2013年も引き続き山元町に通いながら筆甫に住み、県南の仲間たちの主催する講演会を手伝ったり参加したりして、放射能汚染についてや持続可能な暮らし方、本当に「まっとうな生き方」について考え続けていた。

しかしそんなある日、私も手伝いで参加していた講演会の会場のその同じ空間に、未来の夫が居たなんて思いもしなかった。

3. 11 大震災

震災の時は非番で自宅に居り、揺れが治まった後に両親の無事を確認し、すぐ勤務先の消防署へ向かった。道路に大きい石が落下していても通行には支障は無かったが、今でもどんよりとしたあの曇り空が忘れられない。

救急出動は震災から1週間は何かと慌ただしかった。南相馬市から避難者を受け入れていた公共施設からも救急要請があり、内科的症状を訴えていたが、精神面から来る疲れの度合いが強いと感じられ、何とも言えない気持ちでだった。

6月に父、8月に母が亡くなり、震災の年は私の人生にとって大きな節目、激動の1年であった。地域や親戚の皆様を支えられ何とか困難を乗り越えることができた。

そんなある日何気なく「おひさまや」のホームページを見たら、「てとて」が立ち上がったことを知り、つながりたいと思った。

その後、いずれも丸森町で行われた2011年12月今中哲二さんの放射能講演会、2012年9月平野彰秀さんの小水力発電講演会に参加したが、この時、この場所に、未来の妻が居るとは思いもしなかった。

運命的な出逢い

2013年5月、お互いの知人から紹介され、5月27日の「小松菜の日」に秋保へ2人だけの初デート。お付き合いを重ねるうち、お互い同じ方向で、同じ価値観で生きていけると感じ、一緒にいることを決意した。

今でも、初めて見た筆甫の「かりっぺ畑」が忘れられない。そこにはたくさんの虫たちが共存しており、妻は目をキラキラ輝かせ私の知らない虫や植物を一心に説明してくれた。

その年の11月3日に入籍した。11月3日は宮沢賢治が「雨ニモマケズ」という詩を書いた日で、妻は高校時代から賢治の詩を愛読しており、付き合い始めた頃に妻から教わった「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はいか得ない」（出展：農民芸術概論綱要）という言葉に共感し、2人で話し合い入籍をこの日に決めた。

私は生まれてからずっと丸森町耕野で暮してきた。田舎であり、コンビニや信号も無く、「何もない不便なところ」とずっと後ろめたさを感じてきた。我が家は築90年で、冬は冷庫庫は60坪ほど、ただ広いだけの古い家で、階は冷蔵庫のように寒く、茶の間では父が残してくれた「炭」を使い暮している。妻と一緒に暮らすようになり、妻が何度も「この家には素晴らしい可能性があります」と言うのが、私は不思議でしかなかった。

多くの利益は望めないが、本を通して人と人が繋がりが、新たなコミュニティが生まれる「場」を作りたい。

小さないくつかの「なりわい」で、分かち合う働き方が出来れば良いと思う。

妻は自然を愛し、絵やイラストを描いたり手仕事が好きである。一緒に力を合わせ、ロバのようにポクポクとゆっくり歩きながら、自然豊かな丸森町耕野で地球への負担を最小限に暮らしていきたい。

最終章 脱原発 〜未来の子どもたちのために〜

ひとたび、原発事故が起きれば生活は一変する。

何が安全なのか何を食えばよいかわからず、事故後しばらくは、スーパーの中で立ち往生することがあった。以前は素手で触ることが多かった土は、今は手袋無しでは触れることはない。一緒にこの町を盛り上げていたはずの、個性的な仲間たちの多くが、積み上げてきた「財産」を捨てて、遠いところへ避難していかねければならなかった。

信頼できる「てとてと」で食品を測ったり、情報を得ることで、やっと安心して地元の物を食べられるようになった。今も土の放射線量は高く、ホットスポットも点在している地域ではあるが、できる限りの安全な方法や作物の種類を見極めて、畑で自然農の野菜を育ててその種類を楽しんでいる。

2015年8月九州電力川内原発1号機が再稼働した。日本は福島第1原発の大惨事を目撃しても、何も変えようとしな。今年には福島第1原発事故から5年、チェルノブイリ原発事故から30年目を迎えるようにしている。

原発を止めるには、「私たちが自身が変わる」しかないと思う。

——今こそ「脱原発」。

未来の子どもたちが安全で美しい社会で暮らせるように。



てと市